赤十字新聞
The Red Cross Journal Japanese Red Cross Society publication
■編集・発行／日本赤十字社　企画広報室　〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3　TEL.03-3438-1311
一部20円　赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。
2 Feb 2011
Vol.849 http://www.jrc.or.jp
日本赤十字社 Japanese Red Cross Society

はたちの献血キャンペーン

「ぼくらも、いのちの、助けになれる。」

石川遼選手が若者への献血呼びかけ

今年成人を迎える若い世代を中心に、広く献血に対する理解と協力を求める「はたちの献血」キャンペーンが、今年も1月1日から2月28日までの2カ月間、全国で行われています。広報キャラクターは昨年に引き続いてプロゴルファーの石川遼選手。1月17日には都内で記者発表会が開かれました。

「ぼくらも、いのちの、助けになれる。」と石川選手が呼びかけるテレビCMは、すでに1月1日から全国で放送されています。

今年は、2008年に急性リンパ性白血病を発症し、抗がん剤や大量の輸血による苦しい闘病生活を経て、今は元気に小学校に通っている峰山真彩（まさい）ちゃんが石川選手とCMで共演。2人の飾り気のない会話を通じて献血やいのちの大切さを訴える内容です。

さらに、若者を中心に幅広い世代からの人気を誇るフォークデュオ「ゆず」が歌うキャンペーンソング「Hey和」が、CMをいっそう印象深いものにしています。

記者発表会には石川選手、真彩ちゃん、ゆずの北川悠仁（ゆうじん）さんと岩沢厚治（こうじ）さんが出席。ゆずの2人がキャンペーンソングを初披露しました。

若者の献血協力を増やそう

石川選手は2年目となったキャンペーンキャラクターについて、「1年目の経験を生かして今年もがんばっていきたいです。『献血をした』という友達の話を聞くと、減少傾向にあるという若者の献血は、回復する可能性があると思います。その可能性に向けてがんばります」。

大切な血液を分けてくれた多くの人に「ありがとう」の気持ちを伝えたいとCMに参加した真彩ちゃんは、今病気で苦しんでいる人へ、「私も病気が治ったから、がんばってください」と応援のメッセージを送りました。

キャンペーンソングの作詞・作曲をした北川さんは「自分にも（人のために）何かできることがあるのではないかという思いで作りました」。岩沢さんは「すごくいいCMだなと率直に思います。自分たちも感動しました」と語りました。

緊張気味だった真彩ちゃんも石川選手とのツーショットで笑顔に

ゆずの熱唱に集まった報道陣からも大きな拍手が

20歳に向けた 決意新たに

プロゴルファー 石川遼選手

「はたちの献血」キャンペーンの広報キャラクターを1年間務めさせていただき、いろいろなことを考える機会を得ることができました。本当にやってよかったです。

キャンペーンに関わるようになり考えたのは、自分に何ができるだろうかということでした。19歳の自分にできることから始めることだと思い、まず友達に声をかけ、また友達から献血への意見を聞く事を心がけてきました。

そうすると、何人もの友達から「学校に献血バスが来たから献血してみたよ」と、反応があったんです。その声を聞いた時は嬉しかったですね。自分が役立っている実感がありました。

献血した友達も言っていますが、献血の会場ではジュースが提供されたり、漫画も置いてあったり。イメージしている献血の場所と違ってすごく明るい。だから、みんな「楽しく献血できた」って言っています。

献血はそんなに難しいことじゃない。そのことを友達同士で伝えていき、献血の輪が全国に広がっていけば素晴らしいと思います。

献血で助かるいのちがある

テレビCMで共演した真彩ちゃんは、すごく明るい子で、白血病だったことが信じられないぐらいでした。

でも、CMの撮影時に「真彩ちゃんの一番大切なものは?」って質問したら、「いのち」という答えが返ってきて大きな衝撃を受けました。正直、8歳の子どもが欲しがるようなおもちゃやゲーム機かな?って予想していた自分をとても恥ずかしく思いました。同時にそれほどつらい治療を頑張ってきたんだなと感じました。献血をすることで（真彩ちゃんのように）助かるいのちがある。そのことを伝えていきたいです。

僕自身も今年9月で20歳になります。昨年の経験を生かして、2年目の今年は献血者がさらに増えるよう頑張っていきます。

海外たすけあい義援金

6億5135万円の善意をありがとうございました

日本赤十字社がNHKと共同で取り組んだ平成22年度「海外たすけあい」（平成22年12月1日～25日）。全国から寄せられた義援金は1月24日現在で、6億5135万円となりました。

義援金を呼びかける街頭募金は、赤十字奉仕団や青少年赤十字（JRC）のメンバーなどの参加を得て全国で展開。寄せられた義援金は、アフリカやアジアでの紛争犠牲者や自然災害の被災者、貧困に苦しむ人々への支援に使われます。

ご協力ありがとうございました。

160人あまりの報道陣を前にして、日本赤十字社血液事業本部の石川隆英副本部長は、若年層の人口と献血者数が減少する中、血液製剤の供給量を維持するには若い人を中心に献血者を増やすことが大切であることを強調しました。

日本武道館で LOVE in Action Meeting（LIVE）

AKB48出演決定！

若年層に献血を呼びかけ

日本赤十字社は、若者への献血推進啓発事業として2009年10月から展開している「LOVE in Action」プロジェクト（厚生労働省・全国FM放送協議会後援）の一環として、アイドルグループAKB48などが出演する無料ライブ『LOVE in Action Meeting（LIVE）』を6月14日、日本武道館（東京・千代田区）で開催します。

©AKS

プロジェクトは現在、全国のJFN系FM放送局を結んだ献血推進番組の放送や、各地でさまざまなイベントなどを繰り広げています。

応募者の中から抽選で4000組8000人をライブに招待。多彩な出演者の歌やトークを楽しんでもらいながら、若者の献血率が低下している現状を伝え、併せて献血の大切さと協力を広く呼びかけます。

出演はAKB48、ミュージシャンの清水翔太さんほか。追加出演者が決まり次第、追ってお知らせする予定です。皆さまのご応募をお待ちしています。

『LOVE in Action Meeting（LIVE）』開催・応募のご案内

開催日時
2011年6月14日（火）17時30分開場（予定）、18時30分開演（予定）

募集期間
2011年1月31日（月）10時～
2011年5月8日（日）23時59分

応募方法
公式WEBサイト（http://ken-love.jp/）、携帯サイト（http://ken-love.jp/m/）、専用FAX用紙でお申し込みください
※詳しくは公式WEBサイト（http://ken-love.jp/）をご覧ください。

定員　4000組8000人

ゲレンデの守り手になって

雪上安全法講習を開催

アキヤに負傷者を乗せて急斜面を運ぶには高度なテクニックが要求されます

高知県支部は1月21日から23日の3日間、愛媛県ソルファ・オダスキー場で雪上安全法の救助員養成講習を開催。全国から7人の受講者が集まり、スキーパトロールや事故者搬送を行うための滑走法を学びました。

本講習では、スキー板をハの字に開いて滑る基本技術プルークボーゲンから上級レベルのターンまで、さまざまなテクニックを確認します。全日本スキー連盟のスキー検定（SAJバッジテスト）1級に相当する技術を持つ受講者たちですが、「アキヤ」と呼ばれる傷病人搬送のボートを使った滑走は、多くの人が初めての体験となりました。

昨シーズンに続いての挑戦となった新潟県の古川慎太郎さんは、「天候とゲレンデコンディションに恵まれた講習会でしたが、人を救うためにはまず自分自身のスキー技術を高めていかなければならないと感じました。この講習会で学んだことを地元のスキー場で生かしたいと思います」と感想を語りました。

最終日の実技検定により、新たに雪上安全法救助員（スキーパトロール）が認定される予定です。

雪上安全法講習はスキー実技が中心ですが、近年、ゲレンデで目立つのはスノーボーダー。スノーボードで負傷する人の割合はスキーヤーの2倍に上っています。

講師を務めた高知県支部の柚村誠課長は、スノーボードを楽しむ際の注意点として、①コース上で座り込まない②横に広がって止まらない③突然ジャンプ台を飛ばないを挙げます。

「転倒の多い初心者は、くも膜下出血や脳挫傷など重体に陥る可能性も。事前に知識を得ることや基本的な技術の習得、ヘルメットの着用が大切です」と注意を呼びかけています。

今後の雪上安全法講習の開催についてはナビダイヤル（0570－009595）にお問い合わせください。

日本赤十字社では総合職職員を募集しています

仲間になりませんか！
フィールドは無限大
全国に 世界に はばたく

「赤十字の仕事」と聞くと、どんな仕事をイメージしますか？　病院で働く医師や看護師だけでなく、実はたくさんの総合職職員も活躍中。日本赤十字社では、赤十字活動の未来を担うこうした総合職職員を募集しています。人間のいのちと健康、尊厳を守るためにチャレンジしたい、そんな熱い情熱を持つ若い方の応募を待っています。

総合職ってどんな仕事？

日赤が展開する国内災害救護や国際活動、血液事業、病院など9つの事業を支えるのが総合職の使命。その活躍のフィールドは人道にかかわるすべてに広がっています。

エントリーはネットから！

お問い合わせ先

詳細は、マイナビ2012（http://job.mynavi.jp/12/pc/search/corp78424/flex.html）
または日赤ホームページ（http://www.jrc.or.jp/）まで。

※本社および首都圏以外の採用試験については、各道府県支部へ直接お問い合わせください。

胸に秘めた熱い思いを表現

平成23年度日赤年間ポスター撮影の現場から

広報特使の藤原紀香さんと全国の日本赤十字社職員から選ばれた6人が1月13日、都内のスタジオに集い、平成23年度年間ポスターの撮影に臨みました。

今年度のポスターは、幅広い世代に日赤への関心を高めてもらうため、災害に立ち向かう救護班の活動を前面に押し出したデザイン。撮影では、救護服に身を包んだ藤原さんが、人類を危機から救うことをテーマにした映画の音楽をかけて気持ちを高ぶらせる場面などが見られました。

撮影を担当したのは、藤原さんがケニアやバングラデシュなど、赤十字の支援活動地を訪れた際にも同行した菅原一剛（いちごう）カメラマン。菅原さんは、赤十字にかかわる写真を撮るときには、いつも心に決めていることがあるといいます。

「赤十字の広告にはウソがあってはいけないということです。真実を表現することが一番大事だと思っています」。

企画を立案したJR東日本企画の神野さん、森さんは、今回のデザイン意図を「日赤の救護活動を一般の方に伝えることが目的です。そのため普段から人命にかかわっている日赤職員を起用して、使命感や胸に秘めた熱い思いを表現しました」と明かします。「真剣な表情をしてもらったときの視線には独特の力があり、写真からもそれが伝わってきます」と話しています。

シャッターを回す菅原一剛カメラマン

企画立案者の神野さん（右）と森さん

映画で学ぼう ナイチンゲール

「病気は回復過程―看護覚え書より」完成（上映時間45分）

フローレンス・ナイチンゲールの没後100年を記念し企画されていた映画「病気は回復過程―看護覚え書より」がこのほど完成しました。映画は、ナイチンゲールの名著「看護覚え書」を題材にしたもの。同書の着目している人間の自然治癒力に焦点を当て、看護のあるべき姿を再認識するとともに、環境と健康問題にもテーマを広げた内容となっていますので、看護に携わる方以外にもぜひ見ていただきたい映画です。

企画・制作は日本赤十字看護大学「映画 看護覚え書をつくる会」。30人以上集まる集会などに出張上映されるほか、3月にはDVD（またはブルーレイ）が発売される予定です（予価5000円）。

問い合わせ先＝日本赤十字看護大学総務課 TEL03―3409―0875

春夏秋冬

赤十字病院物語

第4回 いのちをつなぐ離島診療 鹿児島赤十字病院

鹿児島市の南部、桜島を望む海岸沿いに位置する鹿児島赤十字病院は、県内唯一の赤十字病院です。病床数は120床と大病院ではありませんが、リウマチ治療をはじめ、関節・脊椎疾患、脳神経疾患などの専門性の高い医療には定評があります。リハビリテーション科も充実していて、設備・スタッフとも県内有数の規模を誇っています。

病院内での診療に加えて、離島への巡回診療も私たちの使命です。当院がへき地中核病院指定を受けたのは昭和56年。現在は、7つの有人島を抱える十島村と、3つの島からなる三島村にある11の診療所に医師などを派遣し、島民の医療ニーズに応えています。

私も以前は、医師と同行し離島診療に携わりました。島民のみなさんはその日を待っていて、診療所に来られます。私たちを頼りにしてくださっていると感じました。また、離島での急患発生時には、ヘリによる医師派遣も行なっています。年間に十数回はこうした出動があり、患者さんのいのちと健康を守っています。

こうした中、昨年10月20日に奄美地方における豪雨災害が発生しました。被災地が離島で交通手段も限られていたことから、被災地に入るまでが困難でしたが、日赤県支部は2班12人の救護班要員を派遣。10月22日から24日までの3日間、避難所での診療活動や巡回診療、連絡が取れない方の安否確認などを行ないました。

私も35軒ほどを安否確認で回り、2人の方を避難所に案内。うちリウマチで寝たきりの女性など2人を病院に搬送しました。

今回の救護活動を通じて感じたのは、病棟での看護も災害現場での救護も基本は同じということです。よく観察し、普段の診療をきちんと行うことが、いざという時の自分を支えてくれます。それを肝に銘じて、これからも患者さんの立場にたった医療、看護を提供し、地域に貢献していきたいと思います。

（鹿児島赤十字病院 看護師 米山智子）

奄美での災害救護

鹿児島赤十字病院
鹿児島市平川町2545番地
☎ 099-261-2111
診療科目 内科／リウマチ科／呼吸器科／整形外科／脳神経外科／放射線科／リハビリテーション科／麻酔科

常任理事会開催報告

平成23年1月21日、本社において平成22年度第9回の常任理事会が開催されました。審議結果は左記のとおりです。

付議事項

1 資金の借入について
（唐津赤十字病院の借入金繰上償還にかかる資金の借入）

2 予算の補正について
（唐津赤十字病院の借入金繰上償還にかかる平成22年度医療施設特別会計歳入歳出予算の補正）

審議の結果、原案のとおり議決されました。

また、トルコ・ヤロワ老人施設改修事業、ハイチ大地震に対する日本赤十字社の対応、骨髄バンク・さい帯血事業、予算の補正にかかる平成22年12月分の社長専決事項の決定状況について、それぞれ報告しました。

第76回代議員会開催公告

平成23年3月18日（金）、午後1時から新霞が関ビル「全社協・灘尾ホール」（東京都千代田区霞が関3丁目3番2号）において第76回代議員会を開催し、左記の事項を付議いたします。

平成23年2月1日
日本赤十字社

記

第1号議案 役員の選出について
第2号議案 平成23年度事業計画について
第3号議案 平成23年度収支予算について

赤十字新聞 THE RED CROSS JOURNAL （第三種郵便物認可） 第849号

科学と博愛で日本近代化の基礎を築く

日本赤十字社を作った男 佐野常民

幕末～明治を駆け抜けた先駆者の知られざる功績

西郷隆盛や桂小五郎（木戸孝允）などの志士が新しい日本の夜明けに向けて奔走していた幕末、明治維新期。彼らの倒幕運動とは一線を画し、科学技術のレベルアップを図ることで西欧に負けない国づくりを目指した武士がいました。佐賀藩士、佐野常民です。後に日本赤十字社の創設者となる常民ですが、日本の近代化に果たした役割はそれだけではありませんでした。

日本で初めての機関車と蒸気船

ペリーの黒船来航から2年後の1855年、佐賀藩の精煉方と呼ばれる理化学研究所で、ある実験が行なわれました。蒸気機関車の走行実験です。

本物の蒸気機関を積んだ全長30センチほどの模型機関車は煙を出しながら線路の上を走行。日本人の手で作られた機関車が歴史上初めて動いた瞬間でした。

この実験の責任者が、精煉方頭人を務めていた佐野栄寿左衛門（後の常民）でした。精煉方では、当時の先端技術であった蒸気機関を研究し、蒸気船の模型も作成。他に電信機や化学薬品の研究も行なっていました。

その10年後の1865年、佐賀藩の三重津海軍所の責任者となっていた常民は、国産初の実用的な蒸気船凌風丸の製造にも成功します。

佐野常民記念館の学芸員、近藤晋一郎さんは「欧米各国の開国要求が強まっていた時代。鎖国下にあってオランダとの窓口となっていた長崎の警護を担当していた佐賀藩は、西欧文明を吸収する必要性にいち早く気付き、精煉方を始めとする理化学研究に乗り出していました。その中心にいたのが常民でした」と解説します。

医者の卵から科学者へ

佐賀藩士の五男として生まれた常民は9歳の時、外科医をしていた佐野家の養子に。養父の仕事を継ぐべく医術修行をしていた彼が、理化学研究を担うようになったのはなぜなのでしょうか。

転機は20代半ばに訪れました。佐賀藩主・鍋島直正の命令で、蘭学を学ぶことになったのです。医師・蘭学者として名高い緒方洪庵や伊東玄朴の弟子となり、西洋医学や化学、物理、オランダ語を習得。佐野の成績はずば抜けていて、玄朴の象先堂塾では塾頭にもなりました。

「その秀才ぶりは直正に高く評価され、精煉方の責任者に抜擢されました。常民自身も『西欧に遅れてはならない。自分たちが中心になって科学技術力を高めたい』との野心があったはずです」（近藤学芸員）

佐賀海軍創設へ

蒸気機関車や蒸気船の模型を作った年の10月、江戸幕府が設けた日本初の海軍学校＝長崎海軍伝習所に佐賀藩からは48人が派遣されます。航海や砲術、蒸気機関などについてオランダから学ぶのが目的です。

この48人の佐賀藩士を束ねていたのも常民でした。

幕府側の伝習生として常民らとともに学んだ一人に勝海舟（麟太郎）がいました。勝は「常民が長を務める佐賀藩は習熟が最も早かった」と振り返っています。

伝習所は3年余りで閉鎖されますが、常民は海軍創設の重要性を藩主直正に説き、三重津海軍所（現・佐賀市）を設立。その責任者となります。長崎の伝習所で使われた蒸気船観光丸（※）も佐賀藩として預かることになり、その船長の任にもつきました。

常民は後年、三重津海軍所での訓練について「国のため懸命につくした日々がまぶたの奥にみがえってくる」との意味の詩を残しています。こうした幕末期の仕事は明治維新後に評価を受け、兵部省（現在の防衛省にあたる）などでの要職を歴任することにつながっていきます。

（※）この観光丸は後年、勝海舟が神戸に主宰した「神戸海軍塾」でも練習船として使われ、坂本龍馬らが船の技術を学んだことでも有名です。

万博での赤十字との出会い

徳川幕府が倒れ、明治政府が生まれる直前の1867年、佐賀藩の代表として常民はパリ万博に派遣されていました。その任務は西欧各国に佐賀藩をPRすること、そしてオランダでの蒸気船買付けでした。

このパリ万博に1863年に設立されたばかりの赤十字がパビリオンを出していました。万博で赤十字の存在を知ったことが常民の後半生に決定的な影響を与えることになったのです。

日本赤十字看護大学元職員の吉川龍子さんは著書『日赤の創始者 佐野常民』の中で「佐野の脳裏には、大阪の適塾で師の緒方洪庵から学んだ人命尊重の精神（略）の教えがよみがえり、（略）人道・博愛を実践する赤十字の存在が、深く心に刻みこまれた」とパリでの常民の心情を推測しています。

赤十字こそ真の近代化

1873（明治6）年、パリ万博での経験がかわれた常民は、ウィーン万博に事務副総裁として参加。各国で赤十字組織が発展していることを改めて知ります。

その時のことを常民は〝文明開化といえば、法律の整備や機械の発達を思うが、赤十字のような組織を大きくすることこそ真の文明である〟という趣旨のことを語っています。そして、4年後の西南戦争で、敵味方の区別なく負傷者救護を図る組織の設立に立ち上がります。同じ志を持つ元老院議官・大給恒とともに、政府内の反対など困難を超えて日赤の前身である博愛社を設立するに至ったのです。

近藤さんは「幕末期の蘭学研究や2度の万博参加を通じて、ヨーロッパとの格差を痛感していた常民は、うわべだけの近代化が許せなかったのではないでしょうか」と語ります。「真の近代化には文明を使いこなす精神が不可欠と感じていた。それが博愛社創設へ彼を突き動かしたのだと思います」

①記念館の学芸員近藤さん。「伊藤博文が『佐野に会うや千万言熱心に一事を続けられ…』と語っているように、常民はいったん事を決めたら、決してひるまない強い信念の人だったと思います」

②パリ万博（1867年）会場に設けられていた赤十字展示館

③緒方洪庵の適塾で用いられた「扶子経験遺訓」（複製：佐野常民記念館所蔵）。ドイツ人医師フーフェランドの医学書を和訳したもので、常民ら門下生に強い影響を与えた

④精煉方で製作した機関車の模型。製作には、常民が他藩からスカウトした田中久重親子ら4人の技術者も協力しました。久重は、維新後に東京に出て、東芝の前身となる機械工場を設立したことでも知られています

⑤凌風丸は全長18m、幅3.3m、10馬力。記念館に隣接する歴史公園には、凌風丸を原寸大の大きさで模した遊具が置かれています

（提供：②"L'Exposition universelle de 1867 ; illustrée, Vol.1." Administration, 1867.（パリ万国博覧会ガイドブック）④⑤佐野常民記念館）

佐野常民・年表

1822（文政5）年	肥前国川副郷早津江に生まれる
1834（天保5）年	藩校弘道館に入学。頭角を現す
1846（弘化3）年	京都の広瀬元恭の下で蘭学修行を始める。2年後には緒方洪庵の適塾で、4年後には伊東玄朴の象先堂で学ぶ
1853（嘉永6）年	佐賀藩の精煉方主任となり、翌々年に国産初の蒸気機関車模型を完成させる
1858（安政5）年	三重津海軍所監督となる
1867（慶応3）年	パリ万博へ佐賀藩代表団として参加。赤十字を知る
1870（明治3）年	新政府の兵部省兵部少丞に任命される
1873（明治6）年	ウィーン万博に参加のため事務副総裁として渡欧
1877（明治10）年	西南戦争での負傷者救護のため博愛社設立。救護活動を開始
1887（明治20）年	博愛社を日本赤十字社に改称、初代社長に就任
1902（明治35）年	10月に名誉社員となる。12月、東京の自宅で死去

倒幕と明治維新

19世紀半ばに欧米列強はアジア各国に進出。日本にも開国の圧力が強まりますが、明確な対応を示せなかったことで、幕府に対する各藩からの信頼は急速に失われていきます。そうした中、天皇を中心にした国を作り、外国を打ち払おうという気運が高まります。「尊皇攘夷」です。

しかし、外国との軍事力の差が明らかになるにつれて、攘夷は不可能との認識が広まり、尊皇と倒幕が前面に。その中心となり、明治維新をなし遂げたのが薩摩、長州、土佐を中心とする下級武士たちでした。「大政奉還」の策を練った坂本龍馬もそうした志士の一人です。一方、常民はこうした政治運動とは一歩距離をおいていたといわれています。

博覧会と近代化

初めて万国博覧会に触れた日本人は、福沢諭吉ら幕府の遣欧使節団。1862 年のロンドン万博でのことでした。そして初の正式参加となったのが 1867 年のパリ万博。佐賀藩は常民を代表とする 5 人を派遣しました。この時、幕府からは明治・大正期を代表する実業家となる渋沢栄一らが参加しています。

博覧会で西欧の最先端に触れた福沢や渋沢、そして常民たちはその後の文明開化のリーダーになっていきます。博覧会の効果を認識した常民は、日本での産業振興に向けた「内国勧業博覧会」も主導。日本各地でも開催された博覧会は、国民に文明開化と新時代を強く印象づける役割を果たし、常民は「博覧会男」と呼ばれました。

1881（明治14）年に上野公園で開催された第2回内国博覧会。博覧会場は東京名所に

（提供：佐野常民記念館）

行ってみよう 佐野常民記念館

各地の有功会※など日本赤十字社にかかわる人々の協力を得て、佐野常民が生まれ育った町・早津江（現・佐賀市川副町早津江津）に平成 16 年にオープンした記念館。博愛社設立など常民がたずさわった多彩な活動が資料や遺品とともに紹介されています。

館内には、幕末に常民らが制作した蒸気船や機関車の復元模型、映像スペースのほか、図書・視聴覚コーナー、赤十字コーナー、多目的室なども設置。見学するだけでなく、さまざまな体験学習ができるのも特徴です。

建物に隣接した佐野歴史公園は、常民が責任者を務めた三重津海軍所の遺構を生かした公園になっています。現在、同海軍所跡は佐賀藩精煉方跡などとともに「九州・山口の近代化産業遺跡群」の1つとして、世界遺産登録を目指した取り組みが進められています。

佐野常民記念館

開館時間 午前9～午後7時（展示室は午後5時まで） 休館日 月曜日、年末年始、その他臨時休館日
展示覧見学料 大人（18歳以上）300円、小人100円　各団体割引あり 場所 〒840－2202 佐賀県佐賀市川副町大字早津江津446－1
電話 0952－34－9455 ホームページ http://www.saganet.ne.jp/tunetami/

※有功会：日赤の活動を支援する団体

（提供：佐野常民記念館）

Sports スポーツとコラボ

ジュニアユースからペットボトルキャップ　岡山

サッカーJ2ファジアーノ岡山のジュニアユースチームが昨年12月4日、岡山県支部にペットボトルキャップ約9万個を贈呈しました。

集めたペットボトルキャップの売却金で、開発途上国の子どもたちにポリオワクチンを贈ろうという、「エコキャップ運動」のために贈呈していただいたものです。運動には県内の青少年赤十字（JRC）加盟校が協力しています。

ファジアーノはゴミ分別の啓蒙活動を通じた社会貢献をめざしており、ペットボトルキャップはこの活動で集めたもの。贈呈式には木村正明代表やジュニアユースチーム選手らが参加しました。

贈られたペットボトルキャップは約9万個

集う！青少年赤十字の高校生　三重

県内のJRC加盟校の高校生70人が企画した「青少年赤十字のつどい」が12月25日、県内最大のショッピングセンター「イオンモール鈴鹿ベルシティ」（鈴鹿市）で開催されました。

会場では加盟校の活動についてのパネル展示、国際交流でパラオを訪問したメンバーの報告、JRC活動資金・使用済み切手収集協力校への感謝状贈呈、アトラクションなどが行われました。

また、JRCメンバーが着ぐるみを着て「NHK海外たすけあい」への協力を呼びかけ、買い物客などから合わせて約4万5000円が寄せられました。

着ぐるみを着て募金への協力をアピール

献血ルームで5万人目の献血者　宮崎

平成20年3月にオープンした宮崎県赤十字血液センターの献血ルーム「カリーノ」で1月5日、5万人目の献血者が誕生しました。

5万人目の献血者となった横山久子さん

献血ルームの前で、一日所長の佐藤あいりさん（右）も献血を呼びかけました。

5万人目は宮崎市内に住む横山久子さんで、記念品としてけんけつちゃんぬいぐるみと図書券が贈呈されました。横山さんは「今日で20回目の献血。患者さんの役に立てばとてもうれしい」と語っていました。

この日、献血ルーム前では宮崎市赤十字奉仕団員や市内にある鵬翔（ほうしょう）高校のJRCメンバーらが「はたちの献血」街頭キャンペーンを行い、若者を中心に献血への協力を呼びかけました。

桜島大噴火に備えて訓練参加　鹿児島

鹿児島県のシンボルともいえる桜島は昨年、1955年の観測開始以降最高の年間噴火回数896回を記録。この桜島の大爆発と地震を想定した「桜島火山爆発総合防災訓練」が1月12日、県と鹿児島市の主催で実施されました。

訓練は、大正3年1月12日の「大正大噴火」の日に合わせて毎年実施されているもので今年が41回目。この時の噴火では58人の死者を出しただけなく、流れ出した溶岩で桜島と大隅半島が陸続きになりました。

「地域の安全は地域で守る」をテーマにした今年の訓練には、住民や県、市などの行政、自衛隊など128機関・団体の計4500人が参加。鹿児島県支部からは救護班要員など13人が派遣され、合同救出救護訓練や救援物資輸送訓練に参加しました。

また、各訓練会場では、赤十字奉仕団と中学生による非常食炊出し訓練、赤十字アマチュア無線奉仕団による通信訓練なども実施。実践さながらの緊張感の中での取り組みとなりました。

大噴火に備え、参加者の動きは実践さながら

災害時のバイク走行やNBC災害対応を訓練　徳島

昨年11月28日、徳島県赤十字バイク奉仕団が災害時の道路交通網被害に備えた走行訓練を市内で行いました。

団員たちは上級者団員のアドバイスを受けながらスラロームや8の字コースでの走行などに真剣に取り組みました。

一方、徳島赤十字病院は11月28日、核物質や生物・化学物質によるテロや災害に備えて、「NBC災害除去セット」を使った傷病者受け入れ訓練を実施しました。

目に見えない放射性物質や化学物質により地域全体、周辺住民が汚染されてしまうのがNBC災害の特徴。訓練では、水除染テントや汚染防護服などを使って、病院への汚染物質進入と二次汚染を防止する処置の確認などが行われました。

真剣な眼差しの奉仕団員

本番さながらの除染作業

英会話学校で外国人向け救急法講習　群馬

群馬県支部は12月24日、県内の太田イングリッシュスクールで救急法基礎講習を行いました。

同学校の外国人スタッフから「救急法の資格を取得したい」との要望が寄せられる中、救急法の英語版テキスト（日本赤十字社作成）が整ったことから、実施されたものです。英会話学校には子どもの生徒も多いことから、いざというときに備えて受講者は幼児への対応も学びました。

担当した救急法指導員は、「言葉は違っても人を救うという赤十字の理念、やさしさは世界共通であることを改めて感じました」と講習の手応えを語っています。

心臓マッサージは「強く、速く、絶え間なく

心からの寄付に感謝

「命と健康を守る」支部の活動に協賛

千葉

千葉銀行の佐久間英利取締役頭取が12月7日、千葉県庁を訪れ、寄付金1229万2785円を千葉県支部の森田健作支部長に贈りました。

「ひと・環境・産業の未来を育む」を、社会貢献活動のコンセプトに掲げる同銀行が、千葉県支部が行う「命と健康を守る」活動に協賛して寄せたものです。

寄付金はＡＥＤ訓練用人形や輸血用血液運搬車両購入などに充てられます

若い人たちの献血推進に

社本

医療機器や試薬などを製造・販売する日本ベクトン・ディッキンソン株式会社から12月17日、血液事業の活動資金として200万円が寄せられました。

同社は献血に積極的に取り組み、福島工場では平成4年から418人が協力しています。

今回、同社創立40周年を記念して「若年層の献血者の増加に役立ててほしい」と寄付していただきました。

若年層向け献血推進プロジェクトの活動に有効活用していくことにしています。

寄付の贈呈をいただいた同社創立40周年記念式典

海外たすけあい義援金

〈大阪〉NHKと共同で毎年12月に行われる「海外たすけあい」。昨年も全国から多くの義援金が寄せられました。

青少年赤十字加盟校である東大阪市立太平寺中学校のみなさんからは12月22日、募金活動をして集まった2043円をお持ちいただきました。

近畿大学泉州高等学校からも同日、生徒と先生らが近隣の駅などで募金した7万6000円余が届けられました。

また久光製薬株式会社の社員の協力のもと、大阪府支部と大阪赤十字病院の職員が12月8日、大阪赤十字病院玄関前で合同募金活動を行いました。募金箱には4万8917円が寄せられました。

〈岡山〉岡山県の職員などでつくる岡山県関係職員労働組合連合から12月27日、海外たすけあい義援金が県支部に寄せられました。

同団体からは毎年協力いただいており、今年も多くの職員の協力で義援金が集められました。牧野一紀書記次長は「赤十字の国際活動にお役立てください」と話しています。

義援金を届ける近畿大学泉州高校の生徒代表

自販機の利益を募金として積み立て

静岡

全国でパチンコチェーンなどを運営する株式会社マルハンの静岡市内店舗従業員の皆さんから12月24日、200万円が贈られました。

従業員用自販機で飲み物を買う際、1本につき10円を募金として積み立ててきたものです。支部を訪れた従業員代表は「災害時に必要な訓練や救護資材の備蓄などに役立ててください」と話しました。

従業員代表らが支部に目録贈呈

ごみ回収の収益金を奉仕団が寄付

山岡

倉敷市児島赤十字奉仕団は12月20日、資源ごみの回収によって得られた収益金を県支部に贈呈しました。

支部を訪れた土屋紀子委員長らは「地域活動の結果としてのお金です。赤十字の事業資金としてお役立てください」と語りました。

クローズアップひと

人のためにできること、伝えたい

全国で展開されている「はたちの献血」キャンペーン。プロゴルファーの石川遼選手と、たくさんの輸血を受け白血病を克服した峰山真彩ちゃんが共演するCMで、バックに流れる曲『Hey和』を歌っているのが「ゆず」（北川悠仁さん・岩沢厚治さん）の2人です。

作詞・作曲は北川さん。「人のために自分に何かできることはないだろうか、身近にある幸せをもっと大切にしていこうという思いを込めて作った曲が、いのちの大切さをテーマにしたCMに使われて、とても嬉しいです」

キャンペーンに先立ち、2人で日本赤十字社を訪問し献血について勉強しました。

「現状や問題点などを教えてもらいましたが、知らないことがたくさんあってびっくりしました。若い世代のなかに『献血』という言葉自体を知らない人もいるということも驚きでした。あらためて音楽を通じて伝えていかなければならないことが、たくさんあると痛感しました」。（北川さん）

同時に、音楽で何かを伝えることといのちをつなぐ献血は、どこか共通点があると気付いたと言います。

ゆずは、国際問題などをテーマにした曲も手がけています。北川さんが子どもを対象にしたボランティア活動に参加してきたことが背景にあります。

「その中で世界の子どもたちの置かれている状況が気になって調べたり、アフリカの難民キャンプに行ったりして関心がどんどん深まりました。そのことをミュージシャンとして、音楽を通して伝えていこうと思っています」

関心を持ち続けるためには「現地で誰かと友達になるっていいと思います。すごく楽しいし、『アイツ大丈夫かな』って関心を持ち続けられます」と笑顔で話してくれました。

横浜市内で路上ライブをしていたストリートミュージシャン出身。路上最後の日はファン7500人が集まったという伝説が残ります。2人による献血の呼びかけは、若者たちの胸に熱く響くはずです。

ミュージシャン

ゆ　ず

北川悠仁さん（左）・岩沢厚治さん

Voice&プレゼント

◆献血でメタボ脱出

――坂野浩治さん（山形市）

検診でメタボといわれ、自分の体を知ろうと献血に励んでいます。献血データをチェックしメタボ脱出。自分のためにもなる献血です。

◆紀香先生のメッセージに共感

――赤松よし子さん（高松市）

〝気づき、考え、実行する〟を合言葉に子どもたちと学校で頑張っています。紀香先生の訪問授業は「いのち、平和」を学ぶ6年生への大きなメッセージになると思いました。

プレゼント応募方法

「赤十字新聞」や赤十字活動へのご意見や感想などを下記までお寄せください。毎月抽選で素敵なプレゼントをお贈りします。

☆今月号のプレゼントはたちの献血キャンペーンソング「Hey和」を歌っている、ゆずのサイン入り写真を3名様に。

（写真はイメージ）

●郵送/〒105-8521　東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社企画広報室　赤十字新聞係
●FAX/03-3437-7091
●メール/koho@jrc.or.jp
（件名「赤十字新聞2月号プレゼント応募」）
●応募締切/2月25日（金）必着
★ご投稿の際は、お名前、連絡先（住所・電話番号）、希望プレゼント名を明記してください。匿名希望の際はその旨もご記入ください。当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

ボランティア国際年　制定10周年

世界の仲間がこんにちは

WORLD NEWS

国連は1997年、日本政府の「ボランティア活動の更なる推進が必要」という提起を受け、2001年をボランティア国際年に制定しました。

10周年を迎えた今年、世界中のボランティア団体が集まったシンガポールで、世界最大のボランティア組織である国際赤十字・赤新月社連盟の近衛忠煇会長は、「ボランティアが保護され、認められるよう活動に取り組みながら、新たなつながりを増やしていきましょう。赤十字のグローバルネットワークはいつでも皆さんとともにいます」と呼びかけました。

きっかけは「自分にできること」

アリス・ホベさんは、2001年からジンバブエ赤十字社のHIV／エイズ・プログラムに携わっています。周囲からは「無給のボランティアなんかやめときなさいよ」と反対されましたが、夫を奪ったエイズに対して、「何かできることはないか」と考えたのです。

アリス・ホベさんは、ジンバブエ赤十字社の郡代表も務めています

子どもを学校に通わせるために働きながら、週３日、HIV／エイズ患者の訪問看護指導や孤児の世話、青少年への感染予防指導を行いました。アリスさんたちボランティアの活動により、感染と差別を恐れて暮らしていた村人たちには次第に結束が戻ってくるようになったといいます。

ローズさんが来ると皆が笑顔に

信頼と尊敬を得たアリスさんは、今では50人のボランティアを束ねるリーダーに。「今後は農業普及員や教師などの資格を取って、引き続きコミュニティーのためにがんばりたい」と意欲を見せています。

みんなの役に立てることがうれしい

「経験豊富なローズさんが来てくれるとうれしい」。妊婦たちが訪問を心待ちにするのは、ウガンダのアムル県ラモギ郡で活動するボランティア、ローズさんです。

母子保健事業を展開中のウガンダで、ボランティアは妊婦の相談役や正しい保健知識の普及を担っています。出産や子育てなど自分の豊富な経験を交えて母子保健の重要性を説くローズさんには、村人からの厚い信頼が寄せられています。「自分の村が好き。みんなの役に立てるのがうれしい」とローズさんは笑顔を見せます。

ダバソ・デンゲ・エレマさんは、ケニア赤十字社の活動に共感し、村人の健康を守るためにボランティアになりました。衛生知識の普及や家屋への薬剤散布などを行って、マラリアや下痢症などの予防に努めています。

2009年に村でコレラが流行したときも、デンゲさんらボランティアは患者の世話や感染予防法の周知に活躍。世界保健機関から高い評価を受けました。デンゲさんは「自分の知識や技術を生かすことで、亡くなる人を少しでも減らせたことがうれしい」と語っています。

インドネシア保健医療支援事業

赤十字病院の医療機材を整備

日本から職員派遣し現場研修も

海外たすけあい義援金などを財源に日本赤十字社が６年にわたって実施してきたインドネシア保健医療支援事業が昨年12月、第２次３ヵ年計画を満了しました。インドネシア赤十字社ボゴール病院に対して医療機材を供与し、併せて日赤の医療施設から医師や看護師らを派遣して助言指導を行ってきました。派遣された医療要員はこの経験を生かして、すでにさまざまな事業で活躍しています。

同病院は首都ジャカルタの南約60キロ、ボゴール市にある中核的医療機関。2005年１月から2010年12月まで支援事業が行われました。

同病院では苦しい財政状況から十分な医療機材を整備することが困難でした。今回の日赤の支援によって、外傷センターやNICU（新生児集中治療室）、ICU（集中治療室）で必要な医療機材が整備され、地域住民に対する医療サービスは格段に向上しました。受診者数が増加し救命率も高まるなど、住民の信頼は高まったといいます。

導入された機材はきちんとしたメンテナンスや各種消耗品の確保ができるようにするため、すべて現地で調達されました。

「現地調達ということに大きな意味があります。医療機材は現地でよく使われているもので、保守管理もしやすいというものでなければ、長く使うことができないからです」（安江一・医療事業部企画課企画係長）

現地の助産師と話し合う鈴木聡子理学療法士

26人の派遣要員が助言や指導

日赤から派遣された医療要員は医師、看護師、助産師、薬剤師、理学療法士ら合わせて26人。

外傷に加えて、現地ではデング熱や腸チフスなど熱帯特有の病気も多く、病院の衛生状態もあまりよくありませんでした。

このため、派遣された要員は、導入された医療機材をいかに有効に運用するかについて現地スタッフと話し合ったり、感染予防のためにしっかりと手洗いをすることを呼びかけたりするなど、医療・看護の質を高めるための助言や指導をそれぞれが積極的に行い、病院内に定着させてきました。

2008年１月にはインドネシア訪問中の秋篠宮同妃両殿下が同病院をご視察され、派遣中の早川真城子助産師（足利赤十字病院）にねぎらいのお言葉をかけられました。

新たに設置された保育器のなかで育つ新生児

超音波検査装置によって的確で迅速な診断が可能に

海外での活動に自信がついた!

今回の支援事業は日赤の医療要員が海外での経験を積む研修の場としても位置づけられました。開発途上国特有の疾病に対する医療知識や技術などを身に付けるのが狙いです。

国際部の斎藤之弥・開発協力課長は「海外の現場で実際を経験することで、職員は国際活動に自信がつきます。現場を経験しなければ自信はつかないし、日本との状況の違いがわかりません。その意味でも今回の事業は非常によい機会でした」。インドネシアで貴重な経験を積んだ多くの職員がすでに、日赤が海外で行っている災害救援や開発協力などに派遣されています。

最後の派遣要員として昨年９～12月に現地で活動した鈴木聡子理学療法士（栗山赤十字病院）は、「海外での活動に自信がつきました。同時に、専門分野を越えて何にでもチャレンジしてみるべきだという思いも強くしました。今はいつ海外派遣のオファーがあってもよいように、国際活動に従事する人材としての準備をしておこうと考えています」と熱い思いを語っています。

今後は防災めぐる支援に重点

日赤は災害が多発するアジア・太平洋地域で、防災を中心とした開発協力をさらに進めることにしています。ボゴール病院に対する今回の支援事業は満了しましたが、インドネシアに対しては今後もさまざまな形での協力が実施されていきます。